研究班番号【110】

高校生の読書離れについての考察

国語班：山本　凜、緒方　萌恵

１．はじめに

「若者の読書離れ」に興味を持ち、現状を調べてみると、高校生の半数は月に一冊も本を読まないということがわかった。そこで、その原因を導くことで、改善案を提示できないかと考えた。

２．調査－1

「小中高生の不読率」より、若者の読書離れの状況を調べた。なお、不読率とは月に一冊も本を読んでいない人の割合のことである。

不読率は、小学生が 5.6%、中学生が 15.0%、高校生が 50.4%であった。このことから、若者の読書離れの状況は、小中学生はそれほど深刻ではなく、高校生が進んでいることが分かった。

また、中学生は過去に不読率が 43.0%の年があったことから、読書離れが改善した事実があることが分かった。

３．調査－2

調査―１から、中学生の不読率が低下した時期とその時に起こった出来事を調べ、高校生の不読率の改善の参考にしようと考えた。

「過去 31 回分の不読者の推移」より、不読率の減少傾向が現れ始めたのは 2000 年以降であり、当時の出来事として、2001 年 12 月に『子どもの読書離れの推進に関する法律」が制定されていたことがわかった。

また、減少傾向は中学生だけでなく、小中高生全体に現れていた。しかし、読書離れの改善にまで達したのは、小中学生のみであった。

４．調査－3

小中学生の読書離れの改善が、本当に法律の制定と関係があったのかを調べた。

法律の概要は、子供たちの読書活動のために、国や地方公共団体が環境を整えたり、政策を考えたりするというものである。制定年以降、全国的に小中学校では朝の読書運動や生徒同士での本の紹介、学校・公立図書館では所蔵図書の充実とイベントの開催が公的に推進されていたことがわかった。

また、「小中高生が読書をするきっかけ」より、小学生は１位に「図書館に行くこと」、３位に「友達の薦める本を借りたり聞いたりする」、「朝の読書活動」、中学生は２位に「友達の薦める本を知ったり借りたりする」、３位に「図書館に行く」、「朝の読書活動」が挙げられていた。

このことから、効果はあったと考えられる。

５．調査－4

高校生にこの法律による不読率の改善の効果が見られない理由を調べた。

その理由は、高校生の行動と政策のギャップにあることが分かった。

調査より、高校生の学校・公共図書館の非利用率は63%、朝の読書活動の普及率が42%であるということが分かった。このことから、高校生は、小中学生に比べて法律によって整備された読書のための強制的な環境が身近に無いことがわかった。

また、「小中高生が読書をするきっかけ」より、1位に「宣伝・広告」、2位に「内容への興味」、3位に「友達の勧め」が挙げられており、1位、2位から、高校生が読書をするには自発的なきっかけが多いことがわかる。

しかし、「現在あまり本を読まない理由」より、1位に「他の活動で時間がない」、2位に「他にしたいことがある」、3位に「普段から本を読まない」が挙げられていた。

また、別の調査より、高校生の授業外の時間は、部活動バイト、塾・自習、スマホやテレビなどの娯楽に使われていた。

このことから、高校生には読書をする習慣がないということが読み取れる。

６．考察

以上の調査から、高校生は小中学生に比べ、強制的な環境が少ないため、主に自発的なきっかけで読書をしているが、そもそも読書をする習慣がないため、不読率が高いという結果になると考えた。

高校生の読書離れを改善するためには、地域や学校、家庭によって、読書環境を整えるだけでなく、小中学生のうちに、読書を習慣化させることや、高校生自身が、様々なきっかけを見落とさず、自ら積極的に読書をする意識を持つことが必要であると考えた。

７．まとめ

高校生の読書離れは、読書習慣が無いことが主な原因であるとわかった。

また、改善のためには、高校生に読書に触れるきっかけや読書を習慣化させる仕組みを作ることが効果的であるとわかった。

８．参考文献ならびに参考ページ

・小中高生の不読書率（学校読書調査、1955年～2013年）